

援助職のリカバリー

《27》

～「セックスレス」に立ち向かう(8)～

袴田 洋子

「今時のアラフィフの女性たちって、セックスレスの人が多いのかな、やっぱり」

香は、ぼんやり天井を見つめながら独り言のようにつぶやくと、隣で寝ている達夫に顔を向けて、ここ最近の京子とのやりとりを話し始めた。達夫は、かすかな微笑を浮かべながら、香が話すのをどことなく嬉しそうに聞いていた。

「多いか少ないかはわからないけど、少なくとも僕は、30歳過ぎた頃には、妻とは、レスになっちゃってたからなあ」

達夫の言葉を聞きながら、香は、達夫と付き合い始めた頃をかすかに思い出せたような感覚になった。達夫と逢うようになってから、もう25年経っている。あつという間だったようにも思えるし、そうでないようにも思える。家事と育児と仕事のあいまの「時間」を作ってきた25年。正直に言うと、たまに、その「時間」を作ることが、億劫に感じるようになってきた。自分もトシをとったのか、とも思う。

でも、この「時間」を作ることは、自分にとって、生きていくためのエネルギーの源だ。この「時間」があるからこそ、夫との家庭生活を継続できているのだ。それは、はっきりと言える。

香は、大学卒業後、薬剤師ではなく一般職で、食品会社に就職した。達夫は、その取引相手の営業だった。香よりも9歳年上だったが、彫りの深い顔立ちと筋肉質な体型のおかげで、実際の年齢よりも若く見えた。会社同士の飲み会に誘われ、そこで初めて達夫と会った。何度か飲み会で顔を合わせるうちに、告

白された。妻子持ちだということは知っていたが、好みのタイプだった。「彼氏」は、大学時代を最後に、長らく居ない状態。なんとなく寂しい気持ちがしないでもない。深く考えずに、お互い楽しくやっていたら、いいんじゃないか。

そんな程度に始めた関係だったのが、今や25年、である。その間、香も結婚し、妊活し、妊娠し、出産、退職。育児真っ只中の時は、数年、会っていなかったけれど、関係は切れなかった。まるで、夫が二人いるような感じだ。

達夫は、妻と別居しているが、達夫の妻は、離婚する気はないらしい。不倫しているのを妻が知っているのかわからないが、達夫は、あまり気にしていない。妻や子どものことを尋ねると、「心配ないよ」と言って、香には、あまり話そうとしない。まあ、話されても困るけれど。

香の夫は、自営業である。親の代から続く仏具屋で、香も店を手伝うことがしばしばある。最近、仏具のミニサイズ化が進み、大型で高価なものは滅多に売れなくなった。これからの子どもの学費だなんだを考えると、夫の収入だけでは、ちょっと余裕がない。ということで、香は、初めて薬剤師として働くことにした。

家事を済ませ、子どもの用事を済ませ、薬局の仕事を済ませ、仏具屋の仕事を済ませ、「時間」を作る。ただし、その「時間」は、公には無いものとして扱われなければならない。が、その架空の時間を作ることは、容易ではない。「大学時代の先輩の家に遊びに行ってくる」が、どこまで夫に信用されているのか、想像すると、もやりと黒色の不安じみたものが広がる。でも、やめられない。この刺激は、手放せない。そう、これは、依存症と言えそうな気がする。年明けに、大学時代のクラブの同窓会があり、30年ぶりに友人たちと再会した。その中の一人、夏子は、香のすぐ近くに住んでいた。しかも、香と同じくらいの映画好きだ。「夏子と映画を観た後、ランチしてくる」も架空の時間にできそうだ。

達夫は、今、賃貸マンションに一人で住んでいた。今年、59歳になる達夫にとって、香が来訪する時間は、幸福そのものだ。一人でいることの寂しさには、とっくに慣れてはいるが、昨年、急性虫垂炎で緊急手術をした時は、さすがに一人の心細さを感じた。香が入院手続きなど、身の回りのことはしてくれて何とかだったが、その後、ストレスのためか、年齢のためか、体調を崩すことが

多くなった。

不安に駆られると、うつっぽくなってしまう。香に LINE を送る回数も増える。達夫と違って、香は家庭があるから、頻繁なやりとりは危険である。香に迷惑は絶対にかけたくない。そう思えば思うほど、香と共に過ごす時間は、達夫にとっても、なくてはならない時間のように思えた。

いつまでこの関係が続けられるか、わからない。行為の最中に、萎えてしまうことも増えた。肉体関係がなければ、香と会うことはなくなるのだろうか。悦びの中に常にある不安。全く逆の感情が、常に同居することへの中毒的な感覚。不倫は、依存症の一種だと誰かが言っていた気がする。多分、本当だ。

玄関のチャイムが鳴り、ドアを開けると、黄色い薄手のブラウスにベージュのコットンリネンのスカート姿の香が立っていた。

「お腹空いたから、お寿司買ってきたよ」

「寿司もいいけど、香を食べたい」

59歳で、こんなセリフを言える色気があるって、すごい。でも、まあ、言われて悪い気はしないかな。

こんな関係を25年も続けてきて、最近、自分の夫の見方が変わったように思う。実家を継いで、仏具屋の経営を維持して、きちんと稼いで、生活させてもらっている。これって、すごいことだ。夫に感謝しなくちゃ、と思う。だから、墓場まで持って行く。